

美術教育の方針(三)

黒田清輝

▲近代の思想

修養の方法と技術の精神とに於ては、今の美術は復興時代の美術に異ることなし、其異なるは思想にして、一層深く天然に親接したるを覺ふ、近代の思想は感情に重きを措くものなり、最看易き實例を文學の風潮に假りて論ずれば、政治の大革命に先ちて既に此新思潮は動き、ギョテ先づ出で、シャトオブリアン、ロオル、ピロンこれに次ぎラマルチンヌとキクトル、ユゴオとありて「ロマンチック」一派の聲は歐洲諸邦に響應して古典派を破りシエクスピアの豪石雄偉なる構思ラシンヌの端嚴典雅の氣格に代るに多趣多感なる人情及天然の表象を以てしたるは顯著なる事實にして、之に達したる手段は、天然の觀察を主としたるにあり、繪畫も亦これと同じき進路を取り、復興時代の繪畫は多く題目の宗教に取れり、其主とする處は體形の穩當を得て、能く全局の勾配を整ふるにあり、而して宗教畫、歴史畫等の意を畫面の布局に傾くるものは、因襲の久しき一種の範型を生じて、自然を外れて形式に依るの弊を爲せり、ロマンチック派の繪畫は、文藝の氣運に誘はれて天然の情趣を描出さんとす、茲に於て藝術は益益天然に親炙して技法を一新し、繪畫を學ぶには天然を學ぶを以て最良の手段となし五十年前の畫風は、天然の寫眞的模倣の極度に達したり、然れども、これよりして畫題の範圍擴張し、技法の自由開て、個人の思想を發舒し得るの道新に生ぜり、一方にはドラクロア一派ありて人事的方面に新思想を表出してアングルの古典派と争ひ、一方に

はコロ、ルウオソ、ミレの輩は天然に制する自己の情緒を叙べて復興時代の藝術が全く度外視せる風景の一派を建てるあり。

▲有力の大家は時勢の先見あり

茲に注意すべきは、文藝にありても將た繪畫にありても、有力なる大家は世に先んじて時代の趨勢を看破し、將來の思潮を開發誘導するものにして、或は爲に其當時に容れられず、而かも一派の首祖と仰かるゝことなり、以て利復興の藝術は十五世紀の末年に現れたるも、百年以前の大家は、早く既に一種の傾向を示したり、ギョテや、キクトルユゴオの名を顯したるは、其壯時にあらずして其の晩年にあり、ドラクロア、コロ、ミレ等が作品を出したる當時にありて、世の藝術は只管天然の實寫を力めて未だ情趣を發揮するに至らず、渠等の時代は遂に此偉才を容れず、一般の進運は其死後に確められたり。

【『二六新報』明治三年三月二七日】